『源氏物語』と落葉

高田祐彦

一

『源氏物語』の作中人物の一人である落葉の宮は、夫の柏木に先立たれたのち、夕霧から求婚され、母一条御息所を喪った傷心の中、やむをえず夕霧の求婚を受け入れる。夕霧との物語が展開される夕霧巻が秋の季節であり、小野の山里の風景が印象的に語られてもいるために、「落葉の宮」という呼称は、落葉というもののイメージもあって、いかにも薄幸の女性を思わせる。しかし、この呼称の由来は、次のように意外なところにある。

もろかづら落葉を何にひろひけむ名はむつましきかざしなれども　（若菜下(4)二三三）

（『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集本により、巻名、巻数、頁数を記す。表記等、改める箇所がある）

これは、女三の宮に恋い焦がれた柏木が、しかたなくその姉女二の宮（落葉の宮）と結婚したことを自嘲的に噛みしめる歌である。女三の宮の求婚者の一人であった柏木は、宮が光源氏に降嫁したのちも忘れることができず、ついに密通の罪を犯してしまうが、それが賀茂祭の頃であるため、祭に縁のある「もろかづら」「かざし」を含むこのような歌を詠んだのである。

「落葉」という語は、『源氏物語』でもう一例用いられている。それは、近江の君に対してである。夕霧が雲居雁との恋をその父内大臣に妨げられていた頃、内大臣に落胤がいたことを耳にした源氏は、尋ねてきた内大臣の子息達を前にして、夕霧に向かって次のように言い放ったのであった。

朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ。人わろき名の後の世に残らむよりは、同じかざしにて慰めむに、なでふことかあらむ　（常夏(3)一二六）

内大臣に妨げられて婿にしてもらえずに、将来の名折れになる

よりは、そんな落胤であっても同じ内大臣の娘なのだから、そちらをもらって気持ちを慰めれば、それはそれでいいではないか、というのである。

この二つの箇所には、「落葉」「拾ふ」「かざし」という表現の一致があり、作者はその一致に自覚的であったにちがいないといわれる。[1] なぜ、落葉の宮と近江の君にともに「落葉」という語が用いられ、そのことがいかなる物語を作り出すことにつながるのか、という問題を考えてみたい。

二

はじめに、この二つの場面の関連、およびそのことを含めた物語の展開の方法について考えてみたい。

光源氏によって「落葉」と称された近江の君は、この常夏巻で内大臣と対面する。物語中随一ともいうべき特異なキャラクターは、読者の笑いを誘うとともに、このような姫君を迎えてしまった内大臣一家への憐れみさえもたらす。この喜劇によって、いよいよ玉鬘の美質が際立つとともに、玉鬘への源氏の執着も深刻なものとなってゆく。やがて、玉鬘と内大臣との対面が無事に果たされ、玉鬘と鬚黒との結婚という意外な展開によって玉鬘十帖は幕を閉じる。そして、明石の姫君の東宮への入内をはじめとする慶事が続き、夕霧は、「落葉」を拾うことなく、藤裏葉巻で雲居雁との念願の結婚に無事漕ぎつける。

夕霧の代わりに「落葉」を拾うことになったのは、柏木であった。皮肉なことに、近江の君の情報をもたらした柏木が、現実に「落葉を拾う」ことになってしまったのである。夕霧はすぐれた「かざし」を、柏木は劣った「かざし」を手にしたことになる。むろん、朱雀院の女二の宮を「落葉」と受け止めるのは、偶像化した女三の宮と密通の罪を犯してしまい、自虐的になっている柏木の極端な受け止め方にすぎない。とはいえ、女二の宮が更衣腹であり、女御腹の女三の宮より劣る存在であることはたしかである。[2] 女御腹の女三の宮は、光源氏のもとに降嫁して、更衣腹の女二の宮は柏木に降嫁した。女二の宮を得ながらも、まったく心満たされない柏木の様子は次のように語られていた。

まことや、衛門督は中納言になりにきかし。今の御世にはいと親しく思されて、いと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても、思ふことのかなはぬ愁はしさを思ひわびて、この宮の御姉の二の宮をなむ得たてまつりてける。下臈の更衣腹におはしましければ、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり。人柄も、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはすれど、もとよりしみにし方こそなほ深かりけれ、慰めがたき姨捨にて、人目に咎めらるまじきばかりにもてなしきこえたまへり。（若菜下(4)二一七）

女二の宮を軽んじる柏木は、世間体を繕う程度に待遇するだけである。柏木は、蹴鞠の日のかいま見直後から光源氏を巨大な仰ぎ見る存在として受け止めていたが、身の破滅を覚悟する密

通後の状況に至って、「もろかづら」の歌を詠むように、みずからの結婚がいよいよ卑小なものに見えてくるのであった。

その「落葉の宮」と夕霧は結婚することになる。はじめは、あくまで亡き友人の妻として心をかけていたはずであった。しかし、いつのまにか宮に心引かれることになった夕霧は、慣れない恋の道の果て、とうとう落葉の宮と結ばれる。夕霧巻に語られるその顛末は、夫を喪い母を喪った皇女が、臣下と再婚しなければならないという、はなはだ悲痛な展開であり、紫の上の「女ばかり身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし」（夕霧(4)四五六）と始まる感慨すら導き出すものであった。恋に不慣れな「まめ人」夕霧が落葉の宮を求めて混迷を深めてゆくことは、苦い物語となっているものの、夕霧の落葉の宮への気持ちそれじたいは、けっして浮薄なものではなく真摯なものであった。

しかし、夕霧にとって落葉の宮との結婚は、実はほとんど「落葉を拾った」に等しいものであったと、後年明らかにされる。

右大臣も、「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか。我は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」とのたまひ出づれば、宮は、げにと思すに、恥づかしくて御答へもえしたまはず。

（宿木(5)四七五）

これは、今上帝の女二の宮が薫に降嫁した折、夕霧が落葉の宮に語ることばである。夕霧は、「故院」すなわち光源氏でさえ皇女を娶ることができたのは、朱雀院が出家をする段になってであり、まして自分は周囲の反対を押し切って、亡き柏木の妻であったあなたを「拾った」に過ぎないのだ、と言う。この「拾ひ」という表現に注意したい。ここには、同じ光源氏の子といいながら、皇女女三の宮を母に持つ薫と藤原氏を母に持つ自分との大きな差を噛みしめる劣等意識がおそらく潜んでおり、それは柏木の持っていたそれと通い合うものなのであろう。薫の果報を語る文脈の中でこれまでに語られていなかった側面が明らかにされたものともいえようし、これまで語られてきたことが新たに意味づけられることになったともいえよう。このように、物語としてはずいぶん先になってからではあるが、落葉の宮は、再び「拾われた」存在となったのである。夕霧の側から見れば、近江の君を「拾う」ことはなかったものの、落葉の宮を「拾う」ことになっていたのだ。

このことは、薫と女二の宮との結婚が、少し後で藤の花の宴で祝われるということとも関わりがあるだろう。夕霧と雲居雁との結婚が許されたのも、内大臣の藤の花の宴であった。女三の宮の婿選びの過程で、朱雀院は念願叶った結婚をしたばかりの夕霧を、婿候補として諦めているのでもあった。しかしいま、女二の宮を賜った薫に比べれば、夕霧と雲居雁との結婚は、所詮臣下同士の結婚に過ぎぬ。再婚となる落葉の宮も「拾った」に等しい。しかも、「女二の宮」という点では、薫も夕霧も共

通しているのだから、いっそう違いが際立つのである。

以上の検討から、夕霧と柏木に関わる「落葉を拾う」という表現および発想を、ほぼ共通した意味合いで捉えてよいと考えられる。それは、「落葉」という語の表現史に照らしてみると、どのように見えてくるのか、次節で考えてみたい。

三

「落葉」という語は、平安時代の前期中期には、漢詩文を除いてほとんど用例が見られない。わずかに『後撰集』の次の歌などを、辞書や索引類などが挙げているに過ぎない。

秋の夜の月の影こそ木の間よりおちば衣と身にうつりけれ
（秋中・三一八・よみ人知らず）

この歌の「おちば衣」は、「落葉衣」と解されているのであるが、稿者には疑問に思われるので、以下に検討してみたい。

まず、「落葉衣」と直接に解するのは、「木の間より」が用言を求めることからして、無理であろう。「木の間より」が「身にうつりけれ」にかかると見ることもできるが、後述する古今集歌との関係から見て、むずかしいと思われる。そこで、ここに「落ち」という動詞を認め、「落ちば」と解釈してみると、仮定の「ば」では、「身にうつりけれ」という五句とは合わなくなってくる。そのため、新大系は、「『落ち』で切り、『落葉衣』と掛詞になって下に続いていると解した」と、「落葉衣」という語を生かしつつ、歌の文脈にも適合させる苦心の解を示す。

しかしながら、いったい「落葉衣」とは何であろうか。新大系は、「仙人が着る衣だというが未詳」として、「みずからの落ちぶれた様子を暗示しているのであろう」と敷衍している。仙人の衣という理解は、『後撰集新抄』が、

月影の木間をもりて斑に身にうつるを、仙人などの木葉をあつめ綴りて着たるさまの如く思ひよせたるにはあらじか。木の間よりといひ、身にうつりとあるなどよく思ふべし。[3]

と説いていることによるのであろう。落葉を衣としてまとう姿ということで、もっともらしい説ではあるが、たとえそうした見方を認めたとしても、「おちば衣」あたりの表現の不自然さは解消されない。ちなみに、落葉衣の用例は、南北朝あたりまで下らないと現れない。[4]ここの例が落葉衣だとすれば、ずいぶん時代が隔たってしまうという点も、落葉衣と理解するうえで不利な要素である。

表現に抵抗をおぼえる「おちばころもと」あたりの本文それじたいにも、実は問題がある。早く契沖は、ここを『新撰万葉集』の本文から理解する手だてをとっていた。すなわち、この歌について、「下句、おちはころもと身にうつりけれとありて、こゝろえかたし」として、『新撰万葉集』には「堕者衣砥見江亘気礼」とあるところから、「此真名にか、せたまへるにて心得べし」とした（『河社』）。『河社』の『契沖全集』所収の本文によれば、契沖は、この『新撰万葉集』の本文を「オツレハキヌト」と訓んだようである。

この『新撰万葉集』の本文は、契沖と同じく多くは「おつればきぬと」と訓まれているようだ。[5] もちろん、訓みそのものとしては、『後撰集』と同じように「おちばころもと」と訓むことは可能である。

さらに、この歌は、『古今六帖』（第五・秋のころも）にも収められている。下の句は、『図書寮叢刊』本（新編国歌大観も同じ）では、「おとはころもとみにうつりぬれ」とあり、「おとは」の箇所に、「チテイ」と傍記がある。異本では「おちて」に作るということであろう。さすがに「おとはころも」では意味が通じない。『校証古今歌六帖』は、本文を「落葉衣と」としながら、『新撰万葉集』を本文「堕者衣砥」、傍訓「オチテハキヌト」として引き、「落葉衣とありては心得かたきをかくあるにてあきらかなり」と注する。

以上、『新撰万葉集』および『古今六帖』からは、「おつればきぬと」あるいは「おちてはきぬと」という本文が有力ではないかという推定にも導かれるのである。

ここであらためて、『後撰集』の本文異同に目を向けるならば、「おちばころもと」の箇所は、中院本「おちてころもと」、堀河本「おちて心と」という異同がある。この箇所に関しては、この異同は無視できない。

なお、付け加えるならば、この歌は、『寛平御時后宮歌合』にも載るのであるが、十巻本では上の句のみあり、下の句が欠けている。いかなる理由によるものか定めがたいが、あるいはこうした本文異同などが影響を及ぼしているのであろうか。ちなみに、新編日本古典文学全集『古今和歌集』付載の『寛平御時后宮歌合』（書陵部本）には、下句が付いていて、「落つるは衣と」となっている。

おそらくこの歌は、「おつればきぬと」あるいは「おちてはきぬと」とあるのが、本来の形なのではなかろうか。このような本文であれば、「落葉衣」という正体不明のものを介在させずに、木の間から漏れてくる月光を衣に見立てた歌と理解できる。同様の歌に、

ひさかたの月のきぬをばきたれども光はそはぬ我身なりけり

（『拾遺集』物名・四二二・すけみ）

という歌もある。

さて、この歌は、『古今集』の、

木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり

（秋上・一八四・よみ人知らず）

をふまえていることは、一見して明らかである。古今集歌の「もりくる」を、後撰集歌では「落ち」に変換しているが、ここには少しおもしろい問題がある。この古今集歌は、清輔本などが「もりくる」を「おちくる」や「おちたる」に作る。また『新撰和歌』でも「おちくる」である。片桐洋一『全評釈』もこの異同に注目しているが、同書も言うように、古今集歌としては「もりくる」の方が妥当な本文なのであろう。むしろ、後撰集歌に影響されて古今集歌の本文が動いたケースと考えられる。

月の影が「落つ」という表現は数が少なく、『新古今集』の次のよく知られた歌から見ても、清輔はそれを好んだようだ。

冬枯れの森の朽ち葉の霜の上に落ちたる月の影の寒けさ

（『新古今集』冬・六〇七）

清輔が、この後撰集歌に注目していることは、『袋草子』『和歌一字抄』などに収めていることでもよくわかる。

以上の考察から、後撰集歌の「落葉」を認めることは、いささかむずかしいと考えられる。したがって、『源氏物語』とほぼ同時代に「落葉」の用例を求めることは困難となってくる。次に、もう少し範囲を広げて、「落葉」という語を考えてみることにしよう。

四

『源氏物語』以前の「落葉」の用例としては、『古事記』に見出すことができる。下巻、雄略天皇が長谷の槻の木の下で酒宴を催した時、三重の采女は、盃に槻の葉が落ちたことに気づかずに天皇に奉ってしまった。

其の婇（うねめ）、落葉の盞（さかづき）に浮けることを知らずして、猶大御酒を献りき。

天皇は怒り、采女を打ち据え、斬り殺そうとするが、采女が歌を詠むことで赦されたという話である。ここでは、落葉は風情のあるものではなく、神聖な酒を汚すものとしてある。

その後、「落葉」は、漢詩文を除くとふっつりと消えてしまう。漢詩では、『文華秀麗集』の「神泉苑九日落葉篇」（嵯峨天皇）をはじめ、詩題にも詩にも見出すことができ、『新撰万葉集』『菅家文草』『本朝文粋』『本朝麗藻』など、主だった漢詩文作品に落葉の詩や詩序は収められる。落葉の降り積もった風景の美を詠むもののほか、閑居や隠逸の住まいの象徴や、落葉の降る音を雨に聞きまがうものなどが特徴をなす。やがて、『後拾遺集』の時代になると、次のように歌題として現れてくる。

月前落葉といふ心を　御製（白河天皇）

もみぢ葉の雨と降るなる木の間よりあやなく月の影ぞもりくる

（『後拾遺集』秋下・三六二）

落葉如雨といふ心をよめる　源頼実

木の葉散る宿は聞きわくかたぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

（『後拾遺集』冬・三八二）

それでもまだ、和歌や散文には用例が見られないようであり、ようやく平安末期になって、和歌に例が見られるようになる。

落葉

山里はならの落葉を踏む音に問ひくる人ぞかねて聞こゆる

（『出観集』）

山家冬といへる心をよめる　藤原敦経朝臣

山里はならの落葉に跡たえて時雨のほかのおとづれもなし

（『月詣集』）

勅撰集では、『新古今集』にいたって、次の歌が入集する。

千五百番歌合に　左衛門督通光

限りあれば信夫の山のふもとにも落葉が上の露ぞ色づく
（恋二・一〇九五）

このように、「落葉」が和歌に現れるのが遅いために、「落葉」はいわゆる歌ことばとしては認められていない。

以上のように「落葉」の用例をたどってみても、『源氏物語』との接点を見出すことはほとんどできない。多少接点が見出せそうなものとしては、

もみぢ葉の散り来む時は袖に受けむ地に落ちなばきずもこそつけ
（『寛平御時后宮歌合』秋歌）

という歌があり、地面に落ちた落葉は瑕がついて価値のない物、無用の物となるという捉え方があることを確認できる程度である。

なお、「落葉」と近い語としては、「落穂」がある。

…この女ども、「穂ひろはむ」と言ひければ、うちわびて落穂ひろふと聞かませばわれも田づらに行かましものを
（『伊勢物語』五八段）

この女たちのことばとそれに対する男の返歌とは、やや意味がとりにくいが、女が戯れに穂を拾おうと言ってきたのに対して、男はまじめに、落穂を拾う行為は、「うちわびて」、すなわち生活に困ってするわざだと答えたと考えられる。その点で、「落穂」は「落葉」とは近いといえる。

また、落胤という意味では、「孫王の、ひがみたりし皇子のおとしだねなり」（『蜻蛉日記』上）という例がある。

五

以上の用例の検討からは、『源氏物語』と同じような用い方をされた「落葉」の例は、にわかには見あたらないことがわかった。あらためて、『源氏物語』それじたいの問題として、この語からどのような作品の論理が見通されるか、という問題を考えてみたい。

近江の君は内大臣（頭中将）の落胤であり、落葉の宮は内大臣の嫡男である柏木の正妻である。さらに、近江の君の存在は柏木によってもたらされた情報であった。すなわち、この二人は、ともに内大臣と柏木に関わる二人である。ここには、いかなる脈絡があると見るべきなのであろうか。以下、主として常夏巻の場面を掘り下げて検討してみよう。

内大臣は、弘徽殿女御が冷泉帝後宮で秋好中宮に押されていること、また東宮に入内させるつもりであった雲居雁が夕霧と恋仲になってしまったことなどから、夕顔の遺児を探し求めていた。そこで名のり出てくる娘を求めていたところ、近江の君が出てきてしまったのであった。近江の君の噂を光源氏から聞かされた弁少将は、次のような釈明まじりの返答をする。

「ことごとしく、さまで言ひなすべきことにもはべらざりけるを。この春のころほひ、夢語したまひけるを、ほの聞き伝へはべりける女の、我なむかこつべきことあると名のり出ではべりけるを、中将の朝臣なむ聞きつけて、まこと

にさやうに触ればひぬべき証やあると尋ねとぶらひはべりける。くはしきさまはえ知りはべらず。げにこのごろめづらしき世語りになむ人々もしはべるなる。かやうのことこそ、人のため、おのづから家損(けそん)なるわざにはべりけれ」と聞こゆ。

（常夏(3)二二四～二二五）

「中将の朝臣」は、柏木である。こうした弁少将の釈明に、源氏はさらに次のように追い打ちをかける。

「いと多かめる列に離れたらむ後るる雁をしひて尋ねたまふがふくつけきぞ。いと乏しきに、さやうならむもののくさはひ、見出でまほしけれど、名のりもものうき際とや思ふらん、さらにこそ聞こえね。さても、もて離れたることにはあらじ。らうがはしく、とかく紛れたまふめりしほどに、底清くすまぬ水にやどる月は、曇りなきやうのいかでかあらむ」とほほ笑みてのたまふ。

（二二五）

まず注目したいのは、「多かめる列に離れたらむ後るる雁」であるが、これはただちに雲居雁を連想させる。源氏は、もちろん、雲居雁が夕霧との思うにまかせぬ仲を悲しんで「雲居雁もわがごとや」と口ずさんだことは知らない。列に後れた雁までも無理に探し出そうとする内大臣[6]を強欲だと批判する一方、源氏は、自分には名のり出てくる娘はいないと言うが、しかし、源氏の手元には、まさに内大臣が探している玉鬘がいる。そして、この直後に夕霧に向かって「落葉を拾え」と来るのだ。ここでは、列に離れた雁と落葉はほぼ同義であるが、雁による表現の連想からは、今回名乗り出てきた娘は雲居雁よりも劣る落葉だということになる。

次に、「底清くすまぬ水にやどる月は、曇りなきやうのいかでかあらむ」である。素性のよくない女から生まれた娘であればろくなものではない、というこのことばが、直後に「落葉」を呼び出して来るとき、そこには正反対の美しいイメージとして、

風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬ影さへ底に見えつつ

（古今集・秋下・三〇四・躬恒）

という歌の脈絡が立ち働いているだろう。そして、同時に、先に「落葉」の例で挙げた『古事記』の盃に浮かんだ落葉の場面と遠くつながってくる。源氏の戯れに彩られた比喩が、会話の勢いでうまく連鎖しながら「落葉」を導いてくるのである。

「落葉」という語を導き出す、以上のようなことばの連関とともに、前の引用の「家損」という表現に注目したい。この、ひじょうにめずらしい語には、弁少将の、源氏に対するあらたまった気持ちが表れていよう。父大臣の名折れ、というこのことばには、評判の「娘」玉鬘を迎えている光源氏に対する微妙に屈折した思いがにじみ出ている。

こうした弁少将の卑下の意識は、そのまま光源氏の存在感を証し立てているように思われるが、そこから思い合わされるのは、若菜上巻、六条院の蹴鞠の場面である。

柏木の熟達した蹴鞠の技量を見た源氏は、若公達と話をする

中で、柏木に向かって次のように言葉をかけた。

太政大臣の、よろづのことにたち並びて勝負の定めしたまひし中に、鞠なむえ及ばずなりにし。はかなきことは伝へあるまじけれど、ものの筋はなほこよなかりけり。いと目も及ばずかしこうこそ見えつれ　（若菜上(4)一四四）

これに対して、柏木は次のように応答する。

うちほほ笑みて、「はかばかしき方にはぬるくはべる家の風の、さしも吹き伝へはべらむに、後の世のためことなることなくこそはべりぬべけれ」と申したまへば、（一四四）

源氏が、鞠だけは太政大臣にかなわなかったと語ったのに対して、柏木はいささか自嘲的に、公の政務ではわが家は劣っているのに、こういう遊び事だけすぐれていても子孫のためにはならない、と答える。女三の宮をかいま見して、魂を抜かれたようになっている柏木には、蹴鞠の実力をほめられても、それはかえって光源氏と自らの距離を感じさせることになり、その思いは、直後の「かかる人に並びて、いかばかりのことにか心を移す人はものしたまはむ」（一四五）という心内語へとつながってゆく。

このように見てくると、「落葉」が内大臣や柏木に関わって用いられ、柏木や弁少将が劣等感を抱かせられるのは、玉鬘十帖から若菜上下巻にかけて、光源氏方が内大臣方を圧倒してゆくという道筋と連動していると考えられる。納涼の場での光源氏の気楽で開放的な気分で発せられた「落葉」ということばが、密通の罪を犯した柏木の心中の誰にもいえない、いわば閉塞された歌へと反復され、自嘲を深めさせてゆくことになるのである。

なお、落葉の宮に夕霧がひかれてゆく過程にも、注目すべき叙述がある。柏木が亡くなって初夏四月を迎え、夕霧がいつもどおり一条宮に見舞いに訪れる、その場面である。

とかく聞こえ紛らはすほど、御前の木立ども、思ふことなげなるけしきを見たまふも、いとものあはれなり。柏木と楓との、ものよりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを、「いかなる契りにか、末あへる頼もしさよ」などのたまひて、忍びやかにさし寄りて、

「ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと

御簾の外の隔てあるほどこそ、恨めしけれ」とて、長押に寄りゐたまへり。「なよび姿、はた、いといたうたをやぎけるをや」とこれかれつきしろふ。この御あへしらひ聞こゆる少将の君といふ人して、

「柏木に葉守の神はまさずとも人ならすべき宿の梢かうちつけなる御言の葉になむ、浅う思ひたまへなりぬる」と聞こゆれば、げにと思すにすこしほほ笑みたまひぬ。

（柏木(4)三三七～三三八）

二首目の歌は、誰が返したかについて古来議論のあるところで、はっきりしないが(7)、贈答の中心は「葉守の神」にある。木とし

ての柏木には葉守の神が宿るという考えに基づいている。ここが柏木の呼称の由来となった箇所である。すでに、落葉の宮は「落葉」として表現されていたが、ここに「葉守の神」を失ったことによって、いよいよ寄る辺ない身の上となり、「葉守の神」の力に与ることのできない「落葉」としての運命を生きることになる。夕霧が色めかしい思いを表出した最初の場面であり、ここから「葉守の神」不在の中、夕霧は迷走を重ねたあげく、ようやく「落葉」を拾うことになるのであった。

以上、『源氏物語』の「落葉」という語から、物語の展開と表現の仕組みを考えてみた。問題の所在については、「落葉を拾う」と題した、『むらさき』第四八輯（二〇一一年一二月）所収の文章とも重なるところがあるので、併せ参照されたい。

注

（1）稲賀敬二「近江の君登場」（『講座源氏物語の世界　第五集』有斐閣、一九八一年。のち『稲賀敬二コレクション3　『源氏物語』とその享受資料』笠間書院、二〇〇七年）

（2）更衣腹という点では、女三の宮の母藤壺女御も更衣腹であり、若菜上巻巻頭に、朧月夜に圧倒されていたということが語られていた。寵愛した藤壺女御の娘であればこそ、朱雀院は女三の宮を大切にしたのであり、単に女御腹だからというわけではない。

（3）『後撰集新抄』の引用は、『後撰集新抄』（風間書房、一九八八年、復刻版）による。

（4）「山風の落葉衣をかたしきて寝ぬ夜や寒き宇治の橋姫」（『貞秀集』題「橋落葉」）など。

（5）『新編国歌大観』や『新撰萬葉集に関する基礎的研究』など。なお、この歌の『新撰万葉集』の表記は、「秋之夜之月之影許曽　自木間　堕者衣砥　見江亘気礼」である。

（6）のちに、源氏が大宮に玉鬘のことを打ち明けた時、大宮は、「かしこには、さまざまにかかる名のりする人を厭ふことなく拾ひ集めらるめるに、いかなる心にて、かくひき違へかこちきこえらるらむ」（行幸(3)三〇二）と、内大臣が熱心に「落胤」を「拾ひ集め」ていると語った。この「拾ひ集め」という表現も注意しておいてよい。

（7）高木和子「『源氏物語』における代作の方法」（『源氏物語と和歌世界』青山学院大学日本文学科編、二〇〇六年、青簡舎。のち、『女から詠む歌　源氏物語の贈答歌』二〇〇八年、青簡舎）。

（たかだ・ひろひこ／本学教授）